

Shakespeare の嫉妬

—Othello と Leontes の認識を中心にして—

高 橋 昭 三

- I はじめに
—— Jealousy (嫉妬) の悲劇性
- II 嫉妬の認識と Reason (理性)
- III 嫉妬と Passion (激情) の崩壊性
- IV Sin (罪) と Chaos (カオス) の認識
- V おわりに
—— 嫉妬とアレゴリーの限界

I はじめに

—Jealousy (嫉妬) の悲劇性

O, beware, my lord, of jealousy;
It is the green monster which do mock
The meat it feeds on: (Othello, III, iii, 165-7)

人間について語るとき、人間の特性の中の不変的実相をとらえて投射する。そこに浮彫りされるものは、正に生の人間の現実的実像であろう。人間共通の悲劇性を、その典拠を凝視することによって、そこに動めく存在と、その外側に存在するものに同一的内包を見出すことがある。シェイクスピア演劇が、miracle, mystery, moral 劇の範疇に包含されることはあり得ないことであっても、時代の文化、政治、経済等の影響は当然ながら、ルネッサンス、宗教改革による精神的影響が大であることは論をまたない。従って「思考する人間の特性ともなっている道徳的諸前提を共有」⁽¹⁾することによって、普遍的要素を認識しえよう。Basil Willey⁽²⁾によれば、キリスト教信仰 Christianity に対して、(1) its belief in Revelation (2) its doctrine of Original Sin (3) its technique of Redemption が神と人との関係への見方であって、この三点は道徳劇に欠けることの出来ない要素としている。Othello と The Winter's Tale にはこれら全てが含まれてはいないが、嫉

妬の問題を通して(2)と(3)を考えてみることは可能である。

聖書の主題とするものは、神、人間、生、自然、死、運命などすべて根元的諸問題ばかりであるが、抽象的模索ではなく、人間そのものの深淵をめぐって永遠なるものを解こうとしている。新約聖書ヨハネ第一の手紙第三章十五節「あなたがたが知っているとおりに、すべての兄弟を憎む者は人殺しであり、人殺しはすべて、そのうちに永遠のいのちをとどめてはいない」⁽⁴³⁾という言葉がある。1563年ハイデルベルグ信仰問答⁽⁴⁴⁾の問92にある第六誡「汝殺すなかれ」⁽⁴⁵⁾更に問の106の答で「神は殺人を禁じることによって我々に嫉妬、憎悪、怒り、復讐⁽⁴⁶⁾を殺人の根として憎み、これらのこと凡て彼の御前においては顕わならざる殺人である」と、ピューリタン思想の厳格さをもって教えている。古代の感情論として、「感情の源泉に因するものとして、ヨハネス・ストパニス⁽⁴⁷⁾は分類中の苦の中にある羨望、嫉妬、燐爛、悪意」⁽⁴⁸⁾をあげている。嫉妬については、jealousy-envy-hatred-revenge という一連的な図式思考が考えられ、Lily B. Campbell⁽⁴⁹⁾は、ルネッサンス的思考として The Blazon of Jealousie を引用し、嫉妬の起因するものとして、(1) reason of pleasure (2) reason of passion (3) reason of property of right (4) reason of honor と四分類する。

この二つの劇 *Othello* と *The Winter's Tale* は、ともに英国以外のベニスとサイプラス島、シシリアとボヘミアというそれぞれ異なった世界の設定があるものの、劇の convention である以上、特に時代、場所、環境等への特別配慮を必要としない。そこにおいて繰り上げられる内面的諸問題には、当時のキリスト教倫理が精神的根幹として内在しているのは当然と考える。また嫉妬は、セネカの悲劇概念の範疇に入るものと考えられ、人間の魂の奥底にその悪徳の根を深く沈潜し、愛を憎悪に、尊敬を侮蔑に、信実を虚偽に変質させていく。Emilia と Paulina の説得の言葉からも、その悲劇的特質を知る。

For, if she be not honest, chaste, and true,
There's no man happy; the purest of their wives
Is foul as slander. (*Othello*, IV, ii, 16-8)

for he

The sacred honour of himself, his queen's,
His hopeful son's, his babe's, betrays to slander,

Whose sting is sharper than the sword's;

(W.T. II, iii, 48-7)

この様にして、人間性の面からみても、悲劇性の顕在化として考えられうる。従って Emilia が Desdemona に嫉妬の貧慾なまでの恐ろしさについて説いていることからしても考えられうる。

But jealous souls will not be answered so;

They are not ever jealous for the cause,

But jealous for they are jealous: 'tis a monster

Begot upon itself, born on itself. (III, iv, 159-62)

嫉妬が「悲劇」*Othello*, 「ロマンス劇」*The Winter's Tale* における悲劇性として、またキリスト教倫理観としてどのような様相を示し展開していくかを考察する。

註

- (1) Irving Ribner: *Pattern in Shakespearean Tragedy* (Methuen & Co. Ltd., London), 1960, p. 8.
- (2) Basil Willey: *The English Moralists* (Chatto & Windus, London), 1965, p. 35.
- (3) The Bible by William Tyndale, 1534. Whosoever hateth his brother, is a man slear. And ye knowe that no man slear, hath eternall lyfe abydinge in him.
- (4) 「ハイデルベルグ信仰問答」竹森満佐一訳, (新教出版社, 東京), 1958.
- (5) Exodus, 20:13. Thou shalt not kill.
- (6) 嫉妬—ヤコブの手紙第1章20節, 憎悪—ローマ人への手紙第1章29節, 怒り—ヨハネ第1の手紙第2章9, 11節。
- (7) カーディナ, メトカーフ, ビーブ・センター著, 矢田部・秋重共訳, 「感情心理学史」(思想社, 東京), 1964, pp. 68-72.
- (8) Lily B. Campbell: *Shakespeare's Tragic Heroes* (Barves & Noble INC., New York), 1967, p. 150.

Ⅱ 嫉妬の認識と Reason (理性)

人間は、自己絶体化の認識ではなく、人間相互性の問題を深く認知すること、即ち相互存在の正しい認識を求められる。嫉妬は、この相互存在の一方の破綻から惹起するものともいえる。始めの小さな誤りは、終りには大きな誤りへと拡大されていく。トマス・アキナスが認識について、人間は認識的な能力によって、あるものがさけるべきもの、或いは、求めるべき物であるという判断をしている。従って自然的本能によるものではなく、理性の働きによるとして、「認識は感性の受理にはじまり、一層完成されて全面的認識へと発展」⁽¹⁾ するといわれる。アリストテレスと新プラトン思想を包含し、従来のアウグスチヌ哲学を修正し、トマス・アキナスの尊厳な伝統的

思想の原理の導入し、カルビン思想を捨棄したといわれる Richard Hooker は 'man's 'nature' is (in Aristotles' sense) his reason'⁽²⁾ と、理性にもルネッサンス的ヒューマニズムを与えている。更に人間一人ひとりにとらえているもの、そして交わりをなしているものは理性⁽³⁾ であるとする。R. M. Trye⁽⁴⁾ は 'Reason' を 'as one of 'means' which God has given man to use freely within secular society' として、Hamlet (IV, iv, 36-9) を引用し、カルビンとルターの影響を述べている。従って当時の一般的に理解されていると考えられるトマス・アクイナス、フッカーを中心としてカルビン、ルター思想領域を超越することは困難であろう。

Othello と Leontes の嫉妬は、この理性による抑制、あるいはその働きによって善悪の判断をする事の阻害が問題として考えられる。それは理性の限界性、否、人間にとっての限界性とも考えられる。

There are more things in heaven and earth, Horatio,
Than are dreamt of in your philosophy.

(Hamlet, I, v, 166-7)

Desdemona が、

my noble Moor

Is true of mind and made of us such baseness

As jealous creatures are,

(Othello, III, iv, 26-8)

と誠実に信頼している夫 Othello。自分自身 'one not easily jealous' (V, ii, 348) と自負しきた Othello の妻に対する信頼 'my life upon her faith!' (I, iii, 291) も苦渋に満みでの崩壊。Leontes の Hermione に対する猜疑心、不信。

Can thy dam?—may't be?

Affection! thy intention stabs the centre:

Thou dost make possible things not so held,

Communicat'st with dreams—how can this be?—

With what's unreal thou coactive art,

And fellow'st nothing: then 'tis very credent

Thou mayst co-join with something, and thou dost

(And that beyond commission) and I find it,

(And that to the infection of my brains,

And hard'ning of my brows.)

(I, ii, 137-146)

全てこれらは嫉妬がその根である。Othello の Desdemona への信頼は、Brabantio が「娘は、父を騙したのだから、貴方も」 'She has deceived her

father, and may thee.' (I, iii, 290) という言葉と、それにエコーした

She did deceived her father, marrying you,
And when she seemed to shake, and fear your looks,
She loved them most. (III, iii, 206-8)

と悪意に満ち、心を錯乱させる Iago の言葉に、Othello は

By heaven, he echoes me,
As if there were some monster in his thought
Too hideous to be shown. (III, iii, 106-8)

と自問自答する。このことは、'Iago is not really leading Othello, but Othello Iago'⁽⁶⁾ と、Othello 自身が、猜疑心をまた内なる邪鬼を急速に拵げていると、指摘していることは、興味ある事実として受けとめる必要がある。'Monster,' まさに人間の心に巣食うもの。それは Iago の vice 性というよりは、Othello その人の自己悪への自己応答を、他の悪を認識していく過程で、無意識の中に自己認識していく状態を表わしてはいないだろうか。彼は Iago によって初めて、彼自身逆説的に、矛盾を内包化していくのであろう。更に巧妙に、相対的価値の問題を Soul 心と Body 身体、即ち、抽象と具象によって働かず完璧なまでの seduction によって、誤れる事実認識へと進み、妻の裏切り行為であるとの自己絶体的な確信へと移る。Iago を信じ妻を信じない Othello は虚像の実像 'Noble moor' の存在ではなく、'self-deception'⁽⁶⁾ の存在と化する。人間の愛を信じない人間への道を歩む姿である。G. H. Morrison がいう「神に離反した」⁽⁷⁾ 人間の行為と理解出来よう。

Leontes には Hermione が誓言した不滅の愛の言葉も、

then didst thou utter
'I am yours for ever.' (I, ii, 104-5)

Hermione が 'a royal husband' と 'a friend' に対して今だ二度しか用いていないという彼女の言葉も、彼にとって 'ironical'⁽⁶⁾ でしかなかった。ボヘミア王 Polixenes と妻との関係への猜疑は、'If you would seek us, We are yours i'th' garden' (I, ii, 177-8) で益々増大する。友人が妻の説得で滞在延期することで不信は最高潮となる。'Self-deceiving obsession'⁽⁶⁾ 自己強迫観念は Othello と比較すべくもなく 'thy mother plays' (I, ii, 187) と認識していくことで、急激にエスカレートしていく。忠臣 Camillo とボヘミア王が猜疑、嫉妬、悪意の世界と化したツシリーからの脱出で、Leontes の自己葛藤の完全な顕現化の状態全てを凝視しうる。嫉妬の原因とされる事

実は、まさに主観的認識であって、彼等二人はその渦中に彼等自身翻弄され、沈下し、足掻き悶えている。本質的事実の認識欠如であって、事実に裏切りをされているわけではないのだが、彼等は苦悶の深淵に身を焦し焦操作化する。Othello の求愛を知り、愛の仲介をした Cassio、その人の復讐を熱心に懇願する今は妻である Desdemona、Othello は彼女とその Cassio との仲を。そして Leontes は、如何なる悪意といえどもこの世から二人の友情を引裂くことはあり得ないほどの親友 Polixenes と妻との関係を、豈も完全な事実関係だと断定する。二人は共に、現在裏切られているという認識の悲惨さ、残酷さというよりは寧ろ、裏切られたという自己認識としての錯乱を示す。自からをして啓発し、導き、為すべき事と為さざる事を示す理性 Reason の、考える事の喪失である。

What sense had I of her stol'n hours of lust?
I saw't not, thought it not, it harm'd not me:
I slept the next night well, was free and merry;
I found not Cassio's kisses on her lips:
He that is robb'd, not wanting what is stol'n,
Let him not know't, and he's not robb'd at all.

Iago. I am sorry to hear this.

Oth. I had been happy, if the general camp,
Pioners and all, had tasted her sweet body,
So I had nothing known. (*Othello*, III, iii, 338-47)

How blest am I

In my just censure! in my true opinion!
Alack, for lesser knowledge! how accursed,
In being so blest! There may be in the cup
A spider steeped, and one may drink, depart,
And yet partake no venom (for his knowledge
Is not infected): but if one present
Th' abhorred ingredient to his eye, make known
How he hath drunk, he cracks his gorge, his sides,
With violent hefts: I have drunk, and seen the spider...

(*W. T. II, i, 36-45*)

事実に、客観的眞実性に満ちている様に思えても、これはまさに主観的な事実認識に埋没している姿である。彼等なりの実践三段論法を用い、自己懂着

にも拘らず、原因結果の歪曲した論理を構成する。思考と情緒の融合、推理と表面的事実の融合のみで、まったく説明的、証明的論理がない。見出しうるのは、Passion の強烈な役割が理性と知性の役割を圧倒している事である。

自己認識への独断性と意図的追及によっておきた自己盲目化であって、正当な認識の欠如によって惹起したもの ‘the tangible effect of his revolt’⁽¹⁰⁾ と理解しうる。「人は何故理性に従って行動すべきか」の問に対して、それは「人をして人たらしめている特徴が理性にある」⁽¹¹⁾ と、トマス・アクィナスは存在に根ざした価値を理性が示すことを明らかにしているが、現在の Othello と Leontes はまったく倒行逆施の状態に位置しているといえる。I. Ribner が ‘Jealousy has benumbed his reason’⁽¹²⁾ と指摘することも容易に理解しうる。Othello の場合は、抽象を具体化する空虚な努力、曖昧さの確定化への導きがある。それは認識過程に作為さがみられることからでも理解出来る。

That the probation bear no hinge nor loop
To hang a doubt on, (III, iii, 365-6)

Leontes は、現実の抽象化、均衡の不均衡化にあり、一種の錯乱の要素が介在する。共に尊大な矛盾を内包しているにも拘らず、それに無知であることに気づく。Emilia が Othello にこの上もなく潔白で、貞節で、angelic な Desdemona を讃え、Cassio との関係を疑う邪悪な心情を捨て去ることを説く言葉、

I durst, my lord, to wager she is honest.
Lay down my soul at stake: if you think other,
Remove your thought; it doth abuse your bosom.
If any wretch have put this in your head,
Let heaven requite it with the serpent's curse!

(IV, ii, 11-8)

Paulina が牢獄で与えられた新しい生命を抱いて、自省心を失い熱病に侵され感わされているような Leontes に嫉妬の恐ろしさを説き諫める言葉。この二人の女性の言葉、Othello と Leontes の悲劇的狀況のもとで呼びかけているものの中には、何が含まれているのだろうか。自己の知性、理性において把握されたとする倫理的原則とか、体験的实际的経験から築きあげられたとする倫理的法則での他者に対する厳しい追及—Othello と Leontes は嫉妬によって—は、パウロの指摘する人間的矛盾⁽¹³⁾の告白を顕在化してはいな

いだらうか。そしてルネッサンス的キリスト教ヒューマニズムでの意味では、人間の理性は ‘a reflection of the supreme wisdom of God’⁽¹⁴⁾ という理解に対しても、正に逆方向を示していることにも気づく。嫉妬⁽¹⁵⁾ が theatrical convention とは別に、人間の内なる存在として、J. Weilgart も指摘する様に「絶対的原因」⁽¹⁶⁾をも必要としないことを一致して証明している。

註

- (1) 沢田和夫、「トマス・アキナス研究」(南窓社、東京)1963、p. 85。印見徹、「トマス・アキナス」
- (2) Basil Willey: *op. cit.*, p. 102.
- (3) John F. Danby: *Shakespeare's Doctrine of Nature* (Faber and Faber, London), 1968, p. 24.
- (4) R. M. Frye: *Shakespeare and Christian Doctrine* (Oxford University Press, London), 1963, p. 204.
 Sure, he that made us with such large discourse,
 Looking before and after, gave us not
 That capability and god-like reason
 To fust in us unused. (Hamlet, IV, iv, 36-9)
- 彼は、‘large discourse, Looking before and after’の部分を、カルビンが理性の働きについての一般的なルネッサンス的概念を要約するのに類似的用語として用いたこと。また ‘To fust in us unused’はルターの次の言葉に対比すると分析する。
 ‘For God certainly did not give us our reason and the advice and did which it supplies in order to have us contemptuously disregard them’.
- (5) H. A. Mason: *Shakespeare's Tragedies of Love* (Chatto & Windus, London) 1970, p. 107.
- (6) Ivor Morris: *Shakespeare's God* (George Allen & Unwin Ltd., London), 1972, p. 327.
- (7) George H. Morrison: *Christ in Shakespeare* (James Clarke & Co. Ltd., London), 1928, p. 112.
- (8) *Shakespeare's Later Comedies*, ed. by D. J. Palmer, (Penguin Books Ltd., Harmondsworth), 1971, p. 316.
 Inga-Stine Ewbank はこの場面を、‘This recollection of Hermione's forward-looking statement in what triggers off Leonte's first outburst of jealousy’ と指摘する。拙著 *The Winter's Tale* の「明」「暗」での R. G. Hunter と D. Wilson の見解を考え合せると、興味ある嫉妬への過程を考えられる。
- (9) Wolfgang H. Clemen: *The Development of Shakespeare's Imagery* (Methuen & Co. Ltd., London), 1951, p. 196.
- (10) Ivor Morris: *op. cit.*, p. 251.
- (11) 沢田和夫, *op. cit.*, p. 21.
- (12) Irving Ribner: *op. cit.*, p. 101.
- (13) Romans, 7, 7-8. What shall we say them? Is the law sin? God forbid. Nay, I had not known sin, but by the law: for I had not known lust, except the law had said, Thou shalt not covet. But sin, taking occasion by the commandment, wrought in me all manner of concupiscence.

- (14) Irving Ribner: *op. cit.*, p. 97.
- (15) Othello と Leontes の嫉妬の相異性、原因過程についての問題点は、theatrical convention 的に理解することも可能ではあるが、次の四人の見解を付記する。
- ① *The Winter's Tale*, A New Variorum. p. 361.
 'The jealousy which in Othello and Posthumus is an error of judgement, in Leontes is a vice of blood.'
- ② E. C. Pettet: *Shakespeare and the Romance Tradition* (Methuen & Co. Ltd., London), 1970, p. 166.
 'in Othello's jealousy ... it is real, ... because it is supported by so many appearances and by so many devilish subtleties of persuasion. It (jealousy of Leontes) is like some gigantic, incredible Genie suddenly released from a tinny bottle.'
- ③ *Shakespeare's Later Comedies, op. cit.*, p. 118.
 Stanley Wells: *Shakespeare and Romance*. 'Leontes' comparatively unmotivated jealousy may be thought of as an intensification of the play's romance characteristics.'
- ④ A. C. Bradley: *Shakespearean Tragedy* (St. Martin's Press, New York), 1966, p. 158.
 'the wreck of his faith and love' を Othello の嫉妬の根と説明する。
- (16) Wolfgang J. Weilgart: *Shakespeare Psychognostic* (The Hokseido Press, Tokyo), 1952, p. 71.

III 嫉妬と Passion (激情) の崩壊性

「人は自己の衝動を庭師のように、自由に処理できる。そしてこのことを知る人はほとんどいないのだが、怒りや、共感や、熟慮や、虚栄の芽を、生籐のうえに飾り美しい果実のように、爽り豊かに、また有用に、育てることができる」⁽¹⁾ というのはニーチェの言葉である。「俺たちの体は庭園で、意志はそれを手入する庭師だ。イラクサを植え、チサを播き、ヒソップを生やし、ジャコウソウを引き抜こうと、はたまた、薬草を一種だけにしようと、たんと植えてまぜ合わせようと、怠けて不毛の地にしようと、精出して肥やそうと、さて、こんなことを力づくでしようと改めようとするのも、俺たちの意志のままなのだ」(*Othello*, I, iii, 323-30)。衝動と意志(心)との差をおいても、Iago のこの言葉の内容との間にどの位の距離があるのだろうか。Will 意志⁽²⁾は理性的創造物一人間の行為が生じる二つの源泉の一つといわれている。この意志に、誤りが隙間風の様に入りこんだとしたら。

ルネッサンス的思考によれば、罪は Venial sin 小罪(許される罪)と Mortal sin 大罪(死ぬべき罪)があり、ともに Passion に深く関係していると考えられていた。Passion によって、「来るべき永劫を思い、あらゆる

事柄をなし遂げる秩序」⁽³⁾である理性を崩壊させることは大いなる罪と考えられてもいた。‘Physic for’t there’s none’ (*W. T. I, ii, 200*) という程の Passion はそれ自体 moral universe⁽⁴⁾を作り出す力をもつといわれる。質と量について知った時より、それが更に何であるかを認識したときに、より一層自己を凌駕する。他者にとって、この新しいともいえる passion の世界が、それ以上のまたそれより深遠な世界の論理、秩序に圧倒され始めると、悲惨さ、悲劇性はより大きなものへと変質していく。Othello と Leontes の passion は jealousy-envy-hatred と進み、更に wake anger-revenge へと進むのは自明の理といえよう。Iago に pestilence (*II, iii, 362*) をふきこまれる三幕三場90行から279行、そして321行から479行に到る seduction scene。幻覚的妄念をえぐり出すような様々な連想した言葉、それ故に Iago の逆言的方法による言葉の誘惑もあいまって、Othello は次第に自己人為的な変化を示し、嫉妬、怨念は正しい判断を犯し、自制を失なわしめ一切のものと袂別する。

O, now, for ever

Farewell the tranquil mind! farewell content!
 Farewell the plumed troop, and the big wars,
 That make ambition virtue! O, farewell!
 Farewell the neighing steed, and the shrill trump,
 The spirit-stirring drum, the ear-piercing fife,
 The royal banner, and all quality,
 Pride, pomp and circumstance of glorious war!
 And, O you mortal engines, whose rude throats
 The immortal Jove’s dread clamours counterfeit,
 Farewell!

(*III, iii, 347-357*)

白からも寛容しない人間と変貌し、「葉がきいている」(*IV, i, 46*)程に Passion は Reason を完璧なまで圧倒し、Will は庭園を手入する悪意なる庭師となつてしまう。‘Passionate and destructive jealousy’⁽⁵⁾の様相が示され passion の肉感的根源を表面化する。

‘When passion rather reason controls the will, man errs or sins’⁽⁶⁾と L. B. Campbell が時代の倫理観を指摘している。Othello も Leontes も例外ではなかった。まさに理性を凌駕する激情は人間を破壊へと導びいていた。Othello は妻の殺害を心中秘かに抱く。

Damn her, lewd minx! O, damn her!

Come, go with me apart; I will withdraw,
To furnish me with some swift means of death
For the fair devil.

(III, iii, 475-8)

ハンカチは ‘a living reason’ (III, iii, 409) であって、まさに ‘magic in the web’ (III, iv, 69) となっていた。Othello の邪な執念と矛盾の残像⁽⁷⁾を与えるが、迷信的にも固守する愛の象徴性でもあった。時代の倫理観としての cosmos の存在。調和的で理性的なものであって、価値を実現するために存在している。人間は microcosm の存在であり、その中において ‘the passions must be ruled by reason, the God within’⁽⁸⁾なのである。理性に従うことは神に従うという神と人との係り合いは、聖なるものかすでに顕在している cosmos との交流でもある。その自明の相反—有機的構造の崩壊と考えられる。「人は超越的なものへの〈入口〉なしには生きることが出来ない。即ち〈カオス〉の中に生きることが出来ない」⁽⁹⁾ その chaos が自己の内面に認識存在としての位置をしめる結果となったのも当然の事と考えられる。かつては、円満な人格者として称讃された Othello を、

Is this nature

• Whom passion could not shake? (IV, i, 276-7)

と驚愕する Lodovico の胸中に去来するものは何であろうか。Passion による自壊を目のあたりに見た感慨ではないだろうか。Hatred と Revenge が横溢し ‘most bloody’ (IV, i, 92) とり、‘nothing of a man’ (IV, i, 88-9) の露呈となる。ドロドロした内的葛藤の中で、侮蔑と不信と憎悪は極致にいたる。⁽¹⁰⁾

Had it pleased heaven

To try me with affliction; had they rain'd
All kinds of sores and shames on my bare head,
Steep'd me in poverty to the very lips,
Given to captivity me and my utmost hopes,
I should have found in some place of my soul
A drop of patience: but, alas, to make me
A fixed figure for the time of scorn
To point his slow unmoving finger at!
Yet could I bear that too; well, very well;
But there, where I have garner'd up my heart,
Were either I must live, or bear no life;

The fountain from the which my current runs,
 Or else dries up; to be discarded thence!
 Or keep it as a cistern for foul toads
 To knot and gender in! (IV, ii, 47-62)

このうめきは revenge の呻吟であり、jealousy 以降の過程をみせる。怒りは「報復を求める意欲であり、激情である」。報復は「悪徳の是正と正義の秩序維持」にその意義があるとするトマス・アクイナス⁽¹¹⁾の思想への反逆的な行為であり、正に悪意の怒りと報復 'black vengeance' (IV, iii, 447) に満ちている。Desdemona の「ひと言のお祈りを」(V, ii, 83) との哀願をも受容しえない残酷な存在となる。

Leontes は自己判断の優越性を自負し、一つひとつの事象は、全て恐ろしいまで真実そのものであると考えた。行為は決して無ではありえない。

Is whispering nothing!
 Is leaning cheek to cheek? is meeting noses?
 kissing with inside lip? stopping the career
 Of laughter with a sigh (a note infallible
 Of breaking honesty)? horsing foot on foot?
 Skulking in corners? wishing clocks more swift?
 Hours, minutes? noon, midnight? and all eyes
 Blind with the pin and web but theirs; theirs only,
 That would unseen be wicked? Is this nothing?
 Why then the world, and all that's in't, is nothing,
 The covering sky is nothing, Bohemia nothing,
 My wife is nothing, nor nothing have these nothings,
 If this be nothing. (I, ii, 284-299)

無を有にとらえる事の自己矛盾の認識感には彼には存在していない。自虐的に、益々陰険となっていく。そして彼が存在し支配する世界は、'a universe in which the secular judgement no longer has supreme relevance'⁽¹²⁾ であるにも拘らず、彼の予言は全ての的中し、Leontes 自身の knowledge は虚像の実像化への魔法であるかの様に、その魔手を拡大していく。認識は嫉妬を更に悪意化し、'tyrannous passion' (II, iii, 28) へと進む。恐怖と悲惨さを解消する唯一の方法は、妻 Hermione を殺害する以外他に方法がなくなっていく。

were my wife's liver

Infected as her life, she would not live
The running of one glass.

(I, ii, 304-6)

but she

I can hook to me: say that she were gone,
Given to the fire, a moiety of my rest
Might come to me again...

(II, iii, 6-9)

Passion の巨大な傲慢さは、Othello のそれ以上の奔放さをもって全てを圧するので、時には観客の心の中に同一祝出来ない質を見出すこともある。

祝福されるべき生命の誕生は、彼の死を葬送する警鐘でしかなくなっている。Leontes の passion は Othello のように seduction によって、自己人為的に昂進したのではなく、自からの意志と知識で悪化していくものであるから、より残忍なものと考えられる。新生なものは bastard であって、復讐の好餌となる。嫉妬によって引き起された passion と相俟って、孤独感を強めその中に沈潜し、深刻化していく。‘I have drunk, and seen the spider’ (II, i, 45) はその絶叫の熾烈さを示している。まさに passion は彼を偽似創造の中に自己絶対化—最高の支配者—を行う。アポロの神託は政治的利用の道具となり、真実は自分に対する尊大な挑戦でしかなかった。しかし Leontes が神託をうける前、自己正義の正当化の為にこれ以上憎悪をもって深く追及をしないと、自から passion を和らげている。

Though I am satisfied, and need no more
Than what I know,

(II, i, 189-190)

これは Othello とはまったく異なる変化が予言的に暗示されており jealousy-passion の転換を示している。Leontes の認識過程は、G. H. Morrison⁽¹²⁾ のいう ‘active passion of jealousy’ を示している。これに対して Othello は罪過に悶える人間として、醜悪と汚穢を追求する人間の苦悩に満ちあふれながら、自己に埋没し自分を欺く人と同様に自からを瞞したといえる。また知性の役割は passion の焰におかされ、Imagination が薄れ、Iago が ‘you are eaten up with passion’ (III, iii, 391) という程に落ちこみ、passion の役割にいつまでも従属したままとっている。これは ‘passive passion of jealousy’ と考えられる。L. B. Campbell が引用する二学派の論⁽¹³⁾の相克が、Othello と Leontes の Passion と Reason にみられ、その様相は、時代背景をうけたキリスト教倫理観をルネッサンス的思考の中で伝えているものがあることを強く感じる。アポロの逆鱗にふれるまでの Leontes と、Othello

の passion は、理性を圧倒し、悪そのものとしての感覚が強く示されていることに気づく。嫉妬の悲劇は、脆弱な人間の深層に常に沈潜しており、嫉妬により人間の Reason 理性は損なわれ、Passion 激情は天空馬の如く自在に飛翔し人間を崩壊させる。

註

(1) F. W. Nietzsche. 原田義人訳, 「若き人々への言葉」(角川文庫, 東京) 1972, p. 87.

(2) Basil Willey: *op. cit.*, p. 107.

Knowledge and Will: Knowledge to enlighten and inform the soul, and Will to set it in motion.

(3) Lily B. Campbell: *op. cit.*, p. 97.

(4) Morris Freedman: *The Moral Impulse* (Southern Illinois University Press, London), 1967, p. 92.

(5) Derek Traversi: *Shakespeare The Last Phase* (Hollis & Carter, London), 1965, p. 101.

(6) L. B. Campbell, *op. cit.*, p. 248.

(7) Kenneth Muir: *Shakespeare's Tragic Sequence* (Hutchinson University Library, London), 1972, p. 114.

彼はオセロのキリスト教徒と異教徒のもつ宗教的心情の部分を決の様に評す。

The magic in the web of it... suggests that Othello's christianity has not entirely eradicated a residence of superstition....

(8) Basil Willey: *op. cit.*, pp. 68-9.

(9) ミルチャ・エリアーデ, 風間敏夫訳, 「聖と俗」(法政大学出版局, 東京) 1956, p. 26

(10) Derek Traversi: *op. cit.*, p. 103.

Traversi は三幕三場の終りに 'new knowledge' がそれが為、判断の誤りがあり 'destructive fury' にまで到る、と説明している。然しそれは 'heroic simplicity of judgement' の破壊と 'sensual impulses' によるとしている。宗教的倫理観というよりルネッサンス的人間観を重視しているものと考ええる。

(11) 沢田和夫, *op. cit.*, p. 90.

(12) George H. Morrison: *op. cit.*, p. 107.

(13) L. B. Campbell: *op. cit.*, p. 71.

Bishop Reynold の 'Treatise of the Passions and Faculties of the Soule of Man' を引用。①ペリパトス学派の「passion は全てそのうちに悪が存在している。しかし善悪は、理性による節度ある passion の抑制にかかっている」②ストア学派の「passion は、例え理性によって如何に抑制されようとも悪である」の二論の一方に限定されることは出来ないが、ストア的要素がやや強く感じられる。

IV Sin (罪) と Chaos (カオス) の認識

'O fool! fool! fool!' (*Othello*, V, ii, 323) の自責の絶叫は、passion によって自己崩壊し 'madness' (*Othello*, IV, i, 56, 101) におぼれ、愛の象徴である Desdemona と、愛の擬対象⁽¹⁾ととらえられた Hermione, 言い換

れば ‘the Best’ (*W. T.*, I, ii, 419) を破壊した人間のうめきであろう。「発狂した男に捨てられ儚く死んだという」古い「柳の歌」a willow song を、夫 Othello の重く覆いかぶさる不信と邪念に悶えて歌う Desdemona の不安と恐怖の予感は何を意味するのだろうか。

And this, and this, the greatest discords be
That e'er our hearts shall make! (II, i, 200-1)

ここに human frailty がすでに予見出来ることからして、‘Othello is a study of sin in the private individual’⁽²⁾ということが可能ならば、Leontes にも当然類似的な質を考えることが出来よう。

十誡の第五誡から第十誡までの「隣人を愛しなさい」ということを基軸にした第六誡に含まれる jealousy-passion は、当然の結末として Sin であることは間違いない。愛の対立的存在としての envy を罪とするルネッサンス的思考においても、宗教的倫理観からしても、悲劇の命題である嫉妬は明らかに mortal sin を表わしていることといえる。マタイ伝二十六章六十九節から七十五節は、人間の墮落 (the Fall of man) を画いている。人間が避けることの出来ない人間の特性の中の不変的実相をとらえている。即ち Original Sin 原罪性を示している。罪に対する神の罰として(1)「邪悪な人間に与える懲罰の軽重を考えることをも含めて、神は規範として振う」(2)「罪は罪人の魂と良心に因果応報的懲罰をもたらす」⁽³⁾との考えがあり、少なくとも後者は、Shakespeare によって受け入れられたと考えられる。Othello と Leontes 二人は、どの様に Sin を意識し、罪の結果を認識するのであろうか。

Othello は、地獄の責苦に勝る苦悶への代償は死であると Desdemona にせまる。

Oth. Think on thy sins.

Des. They are loves I bear to you.

Oth. Ay, and for that thou diest. (V, ii, 39-41)

パウロの ‘The wages of sin is death’ (ローマ人への手紙六章二十三節) の裏返し的とらえ方である。Leontes は Hermione の破廉恥不貞不実の行為は死刑以下ではないと宣言する。これも Othello の場合と同様因果応報の考えである。Othello は、毒殺より不義をしたあの床で絞め殺しなさいと Iago に毒をもらわれる。

Iago. Do it not with poison, strangle her in
her bed, even the bed she hath contaminated.

Oth. Good, good: the justice of it pleases:

very good.

(IV, i, 220-3)

この時すでに彼自身、神の正義 justice の執行者であり、自からの手で罪を犯した者を断罪出来ると錯覚すらする。すでに「passion におぼれた人間の誤り陥やすい」⁽⁴⁾ 盲迷的世界に存在している以上、自己の内にもみる moral choice をもって、この行為を正当化することは不可能である。死をもって贖罪させようとする彼自身の罪に気づいていない。

It is the cause, it is the cause, my soul,—
Let me not name it to you, chaste stars!—
It is the cause, Yet I'll not shed her blood;
Nor scar that whiter skin of hers than snow,
And smooth as monumental alabaster.
Yet she must die, else she'll betray more men.

(V, ii, 1-6)

自縄自縛の呪いから脱することが出来ず、時には激情し、時には背筋を寒からしめる程に自虐する Leontes に、Camillo が「例え真実であったとしても」貞淑な Hermione をその様に考えることの大きい罪はないと説く。

'shrew my heart,

You never spoke what did become you less
Than this; which to reiterate, were sin
As deep as that, though true.

(I, ii, 281-4)

Antigonus が心から諫言するのも、Othello と同じ世界にいる人間の不正義性を直視しているからである。

Be certain what you do, sir, lest your justice
Prove violence, in the which three great ones suffer,
Yourself, your queen, your son.

(II, i, 127-9)

Othello も Leontes も justice の名のもとで、あたかも神の判断をもって、妻達の（罪）に応報する。‘She must die’ (*Othello*, V, ii, 6) である。これ程の邪悪な罪はない。Desdemona の死を目前に見た Gratiano が ‘fall to probation’ (V, ii, 209) と叫んだ言葉は、彼等二人へ投げかけたものである。

Will you, I pray, demand that demi-devil
Why he hath thus ensnared my soul and body?

(*Othello*, V, ii, 301-2)

ここには、人間の罪そのものを認識したというより、寧ろ、罪の結果の認識 'the fruits of sin'⁽⁵⁾ をしていると考えられる。Othello が Desdemona を、Passion による理性の転倒ゆえに殺害したとはいえ、正当化の理由には決してならない。従って V. K. Whitaker のいう「mortal sin」⁽⁶⁾ の告白にまで到っていないのではないだろうか。然し Shakespeare が同時代の宗教を否定あるいは反抗をしていないと考えられるので、罪に対する普遍的、先見の考えを表現しているものであろう。

罪を犯した人間の世界は何であろうか。自分に投げかけた呪いの言葉 'Perdition catch my soul' (III, iii, 90) が現実に実現するのである。人間は「自ら知者と称しながら、愚かになり朽ちる」のである（ローマ人への手紙第一章二十二節から三節）。パウロによれば、人間は「滅亡の僕」であり、「虚無に服せし者」である。⁽⁷⁾ 神の抜けたあとに虚無の深淵がある。自己の秩序を維持しようとする欲望、それを崩そうとする行為、この葛藤にもがいた時、そしてその結末として人間は死の淵に投げ込まれていく。Passion におぼれた Othello は愛を、愛することを放棄することによって。'My wife! my wife! what wife? I have no wife' (V, ii, 97) と叫び Chaos の世界に自からを投入させていく。またこの chaos は、宗教的倫理を容認しない虚無の世界でもある。Othello に予言的死がなくても、chaos の予言によって、

when I love thee not,

Chaos is come again.

(III, iii, 91-2)

またはその実現によって虚無を表わす。すでに Othello は、自律的人格者としての存在ではなく虚無の存在と化している。虚無を表わすことは自己実現することでもあって、自己実現は死、即ち自殺となる。

自殺の否定、そしてそれは殺人以上の罪があるという当時の考え方は当然である。R. M. Frye⁽⁸⁾ は自殺は悪であること、また Hooker の説教から引用して Othello の sin を説明する。また H. Matthews が 'during the Renaissance men learned to accept suicide in the classical world as no sin but rather a final achievement of personal integrity'⁽⁹⁾ との指摘は、時代のキリスト教倫理観にプラスされている思想としてうけとめられよう。悲劇的結末をもたらした Desdemona の死は、'an impious assertiveness of spirit'⁽¹⁰⁾ を一期に崩壊させ、'my journey's end' (V, ii, 267) へと導いた

ものと思う。愛の実現を彼岸に託す思想は存在してないし、死によって罪が贖なわれないことをも Othello 自身熟知している。煉獄の世界に入ることがないままに、Othello は自責の言葉を発する。

but, O vain boast!

Who can control his fate? (V, ii, 264-5)

O cursed slave!

Whip me, ye devils,

From the possession of this heavenly sight!

Blow me about in winds! roast me in sulphur!

Wash me in steep-down gulfs of liquid fire!

(V, ii, 276-280)

彼は悔悟と贖罪への機会を自から放棄した形で死んでいく。死を恐れなかった、⁽¹⁰⁾ また時を認識したとき従容として命を絶つ。‘’Tis happiness to die’ (V, ii, 290) であった。彼にとっては「最高度の道徳的自由」⁽¹¹⁾ であったのかも知れない。然しこの主体である Othello の現存性が将来を失なう死と変化する時に、永遠性である生のイメージ ‘an image of life’⁽¹²⁾ をみることが出来ると H. Matthews は指摘する。

Des. A guiltless death I die.

Emil. O, who hath done this deed?

Des. Nobody; I myself. Farewell;

Commend me to my kind lord: (V, ii, 122-5)

絶望の中にも Desdemona の死が、forgiveness への橋渡しとなりうるものが少しでも予見されるならば、人間として真なる愛の認識と享有が、そして Leontes の贖罪後の世界への質的転換が可能と考えられる。

悪に犯される人間の弱さ— ‘its corruption begins from its own vice rather than another’s’⁽¹³⁾—は natural instinct ではなく human frailty であった。Leontes の嫉妬は ‘weak-hinged fancy’ (II, iii, 119) からも発芽しているし、その過程においても Othello 程には観客に納得、同意、同情を求めることは困難である。依って、孤独の世界からの挑戦でもある。Hermione を公開の席で、‘high treason’ ‘adultery’ ときめつけ、裁判を実施するのは自己正当化への幻想的行為である。Justice は空中樓閣で、‘the action of blood’⁽¹³⁾ と考えられる。Leontes の chaos は、仮構の世界に実存する疑心暗鬼な自己の現実的存在を確立しようとするための不安である。‘A chaos

of storm and death and devouring death'⁽¹⁴⁾ともいえよう。現実には荒海に漂う小舟の様なもので、我子ですら不信の対象へと変化してしまうものである。⁽¹⁵⁾ 自分自身の自己存在の否定一死への不確実で、陰険で絶望的な克服へのはかない努力とさえなる。

アポロの神託を呪詛し、拒否したときに与えられた Hermione と Mamillus の死は Leontes の存在を凌駕した。しかし彼は自己存在の否定即ち虚無一死への道へと進まなかった。それよりは何ものかの把握へと真実な倫理的自省—自己呪縛からの解放を試みる。Othello とは逆に、宗教の世界へ進むことを意味すると考える。‘Othello is a fallen man’⁽¹⁶⁾と指摘する A. Sewell は、この Leontes の質的転換を ‘part of the optimism of tragi-comic effect’⁽¹⁷⁾ との理解展開をする。罪の奴隷となり、悲劇的経験者の彼が罪の認識をすることによっての変化である以上その範囲のみに留まっていることはないであろう。辛苦の中で、聖なるものを信じ、俗なるものからの跳躍によって真なる自己存在の再認識へと進んでいく。‘The heavens themselves Do strike at my injustice’ (III, ii, 144-5) と悟り、そして悔悟と煉獄の世界に入る。心から罪を告白し、嫉妬で本心を失い残忍な復讐に狂乱したことへの許しを求める。

Apollo, pardon

My great profaneness 'gainst thine oracle!

. . .

For being transported by my jealousies

To bloody thoughts and to my revenge,

(III, ii, 152-3, 157-8)

十六年間の贖罪の生活は、Paulina の責苦の言葉が煉獄の反映を表わしていると考えられる。

I think so Killed!

She I killed! I did so: but thou strik'st me

Sorely, to say I did; it is as bitter

Upon thy tongue, as in my thought

(V, i, 16-9)

これは死よりもまさる責苦の世界といえる。この様にして彼の罪は許される罪に転化していったものと考えられる。

この時代の観客にとって、この結末は決して驚きの変化ではなくなってきた。姦婦、淫売婦、裏切り、とののしられ、残酷な責苦に悶え苦しむ Hermione が、

Tell me what blessings I have here alive,
That I should fear to die? (III, ii, 107-8)

と絶叫しても、死の陰惨な影に全てが覆われている姿とは読みとれない。「人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になるうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことが出来ようか」(マルコによる福音書八章三十六節から七節)、Shakespeare にとっても、人間性の恢復を見きわめること、死で終る人生でなく、soul にふりかかる生と死の問題に変化がおきている。死による悲劇的終末の要素は遠のき、大いなるものの認識による生へと移行している事に気づく。Una Ellis-Fermor が指摘する様に *tragi-comedy* に死は存在しない。⁽¹⁸⁾ 死に近いことがあっても、死はもう必要としなくなってきた。死を基盤とするのではなく、生を基盤としてきているからである。

For death remembered should be like mirror
Who tells us life's but breath, to trust it error.
(*Pericles*, I, i, 45-6)

pardon's the word to all. (*Cymbeline*, V, v, 422)

註

- (1) *Shakespeare Modern Essays in Criticism*, ed by Leonard F. Dean (Oxford University Press, New York), 1967, p. 335.
Robert B. Heilman: *Wit and Witchcraft: An Approach to Othello*. 表層的対比としてとらえた場合、すでに Chaos は出発点から存在することになる。深層的なものと同換し、愛の対象ととらえる。
- (2) Virgil K. Whitaker: *Shakespeare's Use of Learning* (The Huntington Library, San Marino), 1953, p. 275.
- (3) I. B. Campbell: *op. cit.*, pp. 20-1.
当時の道徳観を知るのに役立つと考えられる。
- (4) Virgil K. Whitaker: *op. cit.*, p. 286.
- (5) Honor Matthews: *Character and Symbol in Shakespeare's Plays* (Schocken Books, New York), 1962, p. 135.
- (6) Virgil K. Whitaker: *op. cit.*, p. 278.
- (7) Romans, 8 : 20
For the creature was made subject to vanity, not willingly, but by reason of him who hath subjected *the same* in hope.
- (8) R. M. Frye: *op. cit.*, pp. 24-5.
'A particular appropriate act which at once epitomized and provided retribution for a life of sin' という考えがあることを指摘していることは興味深い。然し、I. Ribner が 'He dies in reunion with Desdemona' p. 95 という論には同意しえない。

- (9) H. Matthews: *op. cit.*, p. 177.
- (10) Julius Caesar の死観は、Othello が現実を認識した時の人間倫理の実現への一つの過程に近いものと考えられるであろう。
 Towards die many times before their deaths:
 The Valiant never taste of death but once.
 Of all the wonders that I yet have heard,
 It seems to me most strange that men should fear,
 Seeing the death, a necessary end,
 Will come when it will come. (*Julius Caesar*, II, ii, 32-7)
- (11) レーヴイット、佐々木一義訳「人間存在の倫理」(理想社、東京)1966, p. 246
 彼は「自殺は自分自身を意識するようになった人間、すなわち、存在することによってそのまま、当然あるべきものにはまだなっていない生物としての人間の格別の一つの可能性」と説明していることは興味あることだが、全面的に肯定することに抵抗を感じる。
- (12) H. Matthews: *op. cit.*, p. 136.
- (13) D. Traversi: *op. cit.*, p. 108.
- (14) Northrop Frye: *Fools of Time. Studies in Shakespearean Tragedy* (University Toronto Press, Canada), 1967, p. 120.
- (15) D. R. C. Marsh: *The Recurring Miracle* (University of Nebraska Press, Lincoln), 1969, p. 129.
 'Even that centre of security in his life is losing its stability' says he.
- (16) Arthur Sewell: *Character and Society in Shakespeare* (Oxford University Press, London), 1951, p. 96.
- (17) A. Sewell: *ibid.*, p. 65.
- (18) Una Ellis-Fermor: *The Jacobean Drama* (Methuen & Co. Ltd., London), 1958, p. 268.

V おわりに

— 嫉妬とアレゴリーの限界

Othello と *The Winter's Tale* での悲劇性としての嫉妬の特質は決して相互離反をしないのは当然といえる。然し大罪の一つであるところの結末への展開が、かならずしも一致してないところに、「悲劇」と「ロマンス劇」としての限界性をみる。観客に対して、動機の論理的説明とか、疑問性に対する論議。類型的識別や、過程等においての各種変化等々が存在するのは当然である。R. G. Moulton²⁶の構図的理解⁽¹⁾による jealousy-passion は、Shakespeare's dramatic sense への理解に役立つ。しかし、本質的理解の上にたち、時代的思考を加味しながら追求してみると、Othello, Leontes それぞれの持つ質は、—Othello の内的要素としての vice 性、Leontes の Iago 的 vice 性と Othello 的自己変質性の内包— 即ち本来的な人間悲劇の要素

が存在していることに気づく。

Time の介在によって、内的葛藤の面で、嫉妬の漸進的、累積的な Othello に比べ、Leontes の激情的、即時的であることも一つの分岐点となり、現実性と仮構性を観客に強く暗示する。従って最後まで観客の sympathy は、*The Winter's Tale* より *Othello* に持続されるものと考えられる。それは、悲劇とロマンス劇としての特性に依拠するための必要性からの限界 — 同一質を内包するなかで、劇的展開での外面的変化 — によることをも考える必要がある。

三つの憎悪の力 (the World, the Flesh, the Devil—七つの大罪はこの三罪の統率下にあるとしている) が展開する道徳劇、人間は如何にして救済出来るか—「窮極救済」‘Castle of Perseverance’⁽²⁾に、人間は如何にして滅びるか (死の存在の肯定によって) から、人間は如何に救済しうるか (死の断面的存在とその否定) がある。死と生との関連で、即ち、Othello は自己検証への無知である為に救済⁽³⁾を得られないが、Leontes は悔悟と贖罪によって救済を得たという様に、道徳劇的質としての救済論的アレゴリーをすることは不自然と考える。それは、Othello が Desdemona を a kind of god⁽⁴⁾ にし、或いは Christ⁽⁵⁾ とするアレゴリーに問題性を感じるのと同じである。イエスがペロニカから受取ったナフキンとハンカチの類推。‘Egregiously an ass’ (II, i, 318) が当時の Judas に対する用語 ‘For the ass to the Juda; give it him— Jud-as, away.’ (*Love's Labour's Lost*, V, ii, 620) であったことから、また殺害前の口づけ (これは愛と貞淑さを、最後の口づけでもって裏切ったことになる) が問題視される。

I kiss'd thee ere I kill'd thee: no way but this;

Killing myself, to die upon a kiss.

(V, ii, 358-9)

これらは、(Othello) オセロ—(Juda) ユダ説となっていく。R. M. Frye⁽⁶⁾ が徹底批判をする J. A. Bryant は Leontes—the Jew, Paulina—St. Paul, Hermione suggests Jesus Christ のアレゴリー化にまで到する。そして最終場面における展開は、嫉妬の罪ある Othello には死、Leontes には贖罪と Hermione の ‘better grace’ と復活 (V, iii, 99-103) による許しが行なわれる。しかしこの二つの劇には、キリスト教倫理が根幹としてあり、嫉妬が原罪であり、その passion から脱けだすことの至難な事実はあるものの、もっと人間的な時代背景をもった展開が感じとれる。

悲劇の世界は action といえるし、action は思いを reality の中に移しか

えていくもの⁽⁷⁾であって、矮小化された reality ではなく、正に人間の内側そのものの拡大が大きく感じられなければならない。Othello と Leontes がそれぞれの悲劇的状況のもとで呼びかけているもの—悲劇の人物はその人物の order を自己の内において求めようとする点においては、二人とも一致していると考えられる。Othello は自分の原因、行為に対して、彼自身の告発者、裁判官、告白者そして死刑執行者としての悲劇そのものの reality を示す。Leontes はこれに反して、他に対する告発者、裁判官、悔悟者そして許される者という反対の存在を示した。彼の嫉妬は、E. C. Pettet のいうロマンス的特色⁽⁸⁾を強めている。Othello は自己への転回があり、Leontes には死—愛による復活という他からの転回がある。それは悪の力（嫉妬による人間性の崩壊）の消滅と、善の勝利によってのみ達成されるであろう「秩序と均衡」⁽⁹⁾への関心がみられるとしても、悲劇とロマンス劇での嫉妬の限界性を示したものと考える。一つの命題で出発し、character の内的葛藤を通して人間の苦悩と罪の大きさを示し、H. Matthews が指摘する様に、Othello の悲劇的結末が一つの転回点⁽¹⁰⁾を与え、同質的要素を外延化して、「悲劇」の思想と「ロマンス劇」の思想を結びつけているものと考えられる。それはとりもなおさず、Shakespeare 演劇の一連的継承思潮での非断絶的要素としての存在を知ることにもなろう。

註

- (1) Richard G. Moulton: *Shakespeare as a Dramatic Artist* (Dover Publication, Inc., New York), 1966, 概略すれば, (1) Passion (pp. 338-55) は Unity-Effect-Nemesis の図式。

Unity-Incident, Situation, Effect.

└ Irony. Nemesis. Foreshadowing

└ a sign connecting very closely
retribution with sin or reaction
with triumph.

Complexity-Tone ┌ Scale of passion-contrasts
└ Mixture of Tones
Clash→tone-storm

Movement (in action) - Tone - Play

(2) Jealousy (pp. 225-7)

Jealousy - the passion of suspicious jealousy

- (2) W. Roy Mackenzie: *The English Moralities Form of the Point of View of Allegory* (Gordian Press, Inc., New York), 1966, p. 58.

この劇は、パウロの「神の武具で身を固めなさい」(エペソ人への手紙 6章10節-20

節) というエピソードへの信論に影響を受けたアレゴリーがあると指摘されている。

- (3) I. Ribner: *op. cit.*, p. 112.
'Othello thinks of himself as destined for hell' として, salvation を得られな
いと指摘する。
- (4) Roy. W. Battenhouse: *Shakespearean Tragedy. Its Art and Its Christian
Premises* (Indiana University Press, Bloomington), 1969, p. 95.
Othello の much of joy の表現が II, i, 186-209 でみられると指摘する。
- (5) I. Ribner: *op. cit.*, p. 112.
- (6) R. M. Frye: *op. cit.*, p. 39.
Bryant のアレゴリーは 'the basic canon of literary scholarship' を無視してい
ると批判する。
- (7) A. C. Bradley: *op. cit.*, pp. 6-14.
- (8) E. C. Pettet: *op. cit.*, pp. 167-9.
P. N. Siegel: *Shakespeare in His Time and Ours* (University of Notre Dame
Press, London), 1968, p. 203.
He says, 'the renewal of life and the regeneration of society which accompani-
es this recovery is the expression of Shakespeare's faith in restoration of the conditions
of the Elizabethan compromise.'
- (9) Northrop Frye: *A Natural Perspective* (Harcourt, Brace & World, Inc., New
York), 1965, p. 145.
- (10) H. Matthews: *op. cit.*,
He says, 'Othello bridges the thought of the tragedies and that of the romances,
and it seems at least possible that his contemplation of Othello's end marked
a turning-point in the growth of Shakespeare's imaginative vision.'

Shakespeare's Jealousy

—On Consideration of Recognition by Othello and Leontes

Shozo TAKAHASHI

1. Preface - Tragedy of Jealousy
2. Recognition of Jealousy and Reason
3. Jealousy and the Collapse of Passion
4. Recognition of Sin and Chaos
5. Conclusion - Limitation of Jealousy and limited interpretation of Allegory

In Shakespeare's plays, *Othello* and *The Winter's Tale*, jealousy may be considered as one of the tragical aspects. Shakespeare shows the different patterns of human conflicts through Othello and Leontes, whose recognition of jealousy are not the same. Here in this essay, I try to find some dramatical, literary connections between 'Tragedy' *Othello* and 'Romance' *The Winter's Tale* through the jealousy of Othello and Leontes, considering the things such as these: Some influences of Renaissance thought and conception, Biblical understanding (especially in St. Paul's teaching), Religious mind and thought, Reason and Passion (in St. Thomas Aquinas and Richard Hooker), and Moral minds of the contemporary.

An Essay on some peculiar features of Sterne's narrative method in *Tristram Shandy*

Hiroshi WATANABE

"Nothing odd will do long. *Tristram Shandy* did not last." As is clear in these words of Samuel Johnson, *Tristram Shandy* has not always enjoyed favorable opinions. But it survived the cruel sentence of the great critic and today its peculiarities, surveyed in a different light, are beginning to awaken the attention of the critics.

This essay is a kind of introduction to the study of the peculiar features of Sterne's narrative method in *Tristram Shandy* and tries to justify his digressive style.